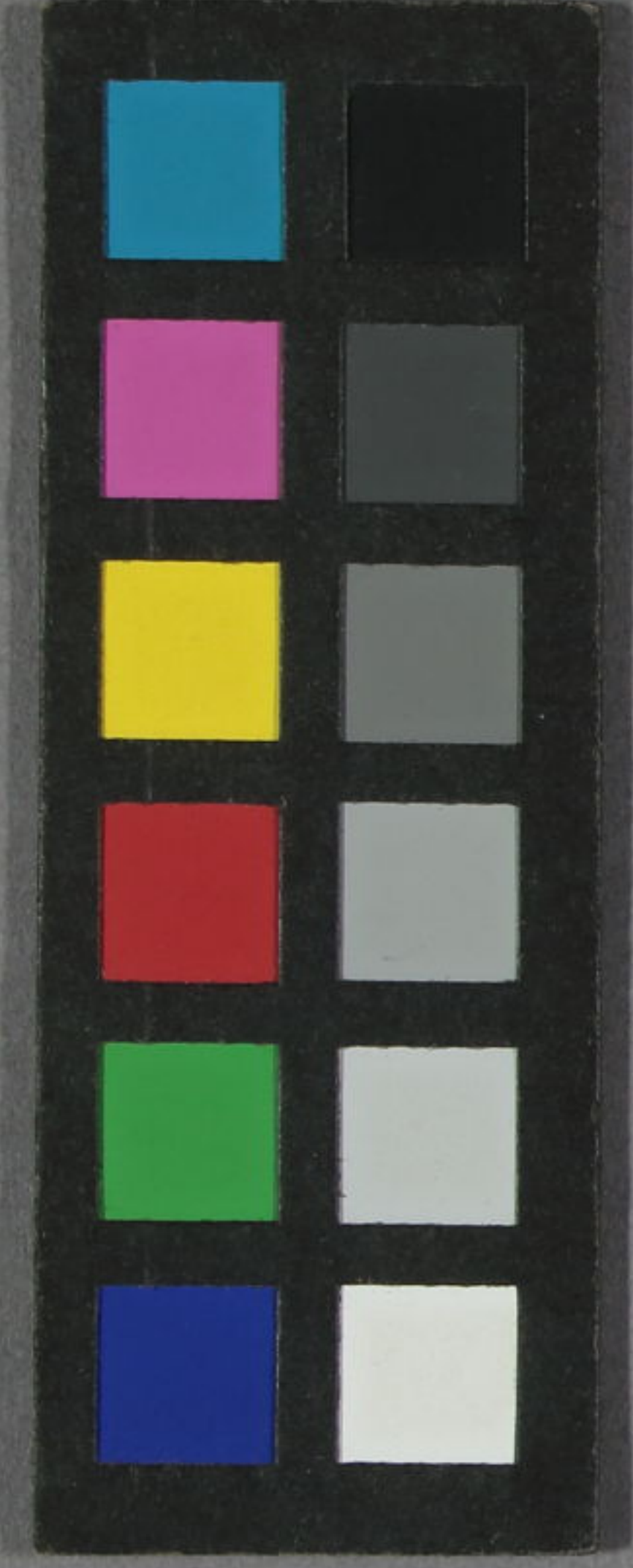


柳菴曉山集

上

卷之三



曉山集序

予集成一冊おこつて今事申て同輩に
呈すゆゑとたとをせしむるは是も
まよあしとあし所よりすてすつて
中ことと世一隅とあびくを呈す
解しんよ廣されしかるを
湖の隅とあびく山所物中し
けり氷のくくは解雲のくくは

唯可のこにんしんはとんまれば徳と云ふ
 まれくと同らりてつとるゝてんてと
 集まらるるらんりんとてんてんてんと
 一——

ありて

まら

天祿十二年己卯春秋



詠諧曉山集目録

- ① 一連歌起りて事一 再時代てり川句
- ② 詠諧起りて別より再連歌詠諧親句是なり
- ③ 面名を事 再十句をてり回答
- ④ 種名の各句を連歌とてりてりてり事
- ⑤ 眼の各句をてりてりてり再句を
- ⑥ 第三の各句を再後てりてり事
- ⑦ 四句をてりてり句をてり事
- ⑧ 五句をてりてり事

- 九 六句の并論と九姿の取つて事
- 十 七八九十句の事 再長場の初と取つて事
- 十一 古今の體積四時發句の事
- 十二 是歌賦の口傳の事
- 十三 體積の別と別 再 貞徳と南無の二法は別
- 十四 本式連歌法の事
- 十五 體積本式ノ法と月拾の事
- 十六 是歌十種ノ事 再 是歌ノ事
- 十七 同此體とありて事

- 十八 宗祇の事 再 宗と公の事
- 十九 六義の事 再 六の事
- 二十 是體篇序の曲流の事 再 是體の事
- 二十一 親の疎の事 再 親の事
- 二十二 是文の事 再 是の事
- 二十三 是の草の事 再 是の事
- 二十四 是の肉骨の事 再 是の事
- 二十五 是の道ノ事 再 是の事
- 二十六 同類の事 再 同類の事

世一 弄の病し事

世二 弄がぶらぶらと行ひ答へ事

世三 雨中かきくさくさ行ひぬる事

世四 未だ記さず白紙に痛む事

世五 云ふ所をいひかき別と行ひぬる事

世六 隔白紙に云ひぬる事

世七 首切し事白紙に

世八 冠を白紙にぬる事

世九 袴を白紙にぬる事

世一〇 香くくく白紙に

世一一 籍の初白紙に

世一二 四ツ子付白紙に

世一三 丸紙付白紙に

世一四 詞くあひいけ合ぬ白紙に

世一五 思惟とくく初白紙に

世一六 さあさ白紙にぬる事

世一七 白紙を別白紙に

世一八 五音を續り白紙に

⑤ 仮名づくしと云ふ片云用捨の事
 ⑥ 体字と云ふ事
 ⑦ 同意と云ふ事
 ⑧ 本奇れやうと云ふ事
 ⑨ 分際と云ふ事
 ⑩ 身と賤と云ふ事
 ⑪ 出家老人の身と云ふ事
 ⑫ 若衆の身と云ふ事
 ⑬ 若僧信たけと云ふ事

⑭ 述懐の事
 ⑮ 意の中と云ふ事
 ⑯ 心と葉と云ふ事
 ⑰ 切字と云ふ事
 ⑱ 連歌詠集十八切字と云ふ事
 ⑲ 小五ツの事
 ⑳ ツツの事
 ㉑ 三ツの事
 ㉒ 不の事

④ 上よ切字をそりておとすも

⑤ 上よ切字をそりておとすも

⑥ 交白字とあてておとすも

⑦ 疑ひておとすも

⑧ 上よ切字をそりておとすも

⑨ 上よ切字をそりておとすも

⑩ 上よ切字をそりておとすも

⑪ 上よ切字をそりておとすも

⑫ 上よ切字をそりておとすも

⑬ 一字の切字をそりておとすも

⑭ 二字の切字をそりておとすも

⑮ 上よ切字をそりておとすも

⑯ 上よ切字をそりておとすも

⑰ 上よ切字をそりておとすも

⑱ 上よ切字をそりておとすも

⑲ 上よ切字をそりておとすも

⑳ 上よ切字をそりておとすも

㉑ 上よ切字をそりておとすも

流傳のりつりつとありて 古人の書

好む人の物とてしるれ じのあつて

此の書は拾遺集抄の流傳といふ付の好む人の書云々
好む人の書也公明ことなり是れ好む人の書なり
とてしるれとてしるれとてしるれとてしるれ
重なる書歌よ今とてしるれとてしるれとてしるれ
又よよよよよよよよよよよよよよよよよよ
天曆御製

美よありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

いふことありありとありて 志げのあり

多しき多しき定家定隆の御事もよくいふべきこと
 みくゆるれ又式目の定もつるは後宮多院建治二年院
 舎者谷為相^{ウチ}信とも建保より六十二年迄の御事あり
 本式連歌の西のめりゆらん

二 継指と各別之事

継指と云ふは先達よりいふところもいふところも
 定まるるはともいふところもいふところも
 大流波と云ふはひらひらと云ふ歌と貴と継指と云ふは
 通におとく宗鑑と云ふはひらひらと云ふその二条後流波

集家流波は師範流波と云ふは家より早下りて
 流波と云ふは家より早下りて
 継指と云ふは家より早下りて
 流波と云ふは家より早下りて
 漢書之流指者僧指也 僧指は家より
 隋書之流指者僧指也 僧指は家より
 大史公曰天道恢々 豈不大哉談言微中亦可以解紛優孟
 多利常以流指訥諫優游善為笑言於大道得于疑
 僧指者多矣部舍人教言陳辞雖不洽大道流令主和流

是等借字大意は借借の字にけりしにせしむるありて
よか人偏賦（主ニタラシキナリ）言とあつりしにせしむるも不説今來は借借の
とせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
してまゝと述妙義（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
利にけりしにせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
て妙義とけりしにせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
又云此の書非之がは此の書可用此の字ラ云く雖此古今拾遺
亦以用此字も不實但は拾遺よりけりしにせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
八雲御抄云或は曰此借有格と二借借（一）二借借（二）三借借（三）四借借（四）

五借借六借借七空賦八鄙儀九和言以上是也 皆奥義抄八卷
以抄さるるは借借の利義と向答するものにて今の借借とてい
つらうは射しとて事なりといふは又云それ借借と云は
いふはとてさういふにせしむるも不説今來は借借の
も不説今來は借借の事なりといふは又云それ借借と云は
あつりしにせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
強ひては借借の事なりといふは又云それ借借と云は
あつりしにせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）
扱知るしとあつりしにせしむるは道（一）とせしむるは道（二）とせしむるは道（三）とせしむるは道（四）

若付しもの人みちりきききりりるあふらのきいひらり
能借も歌として別しもの一かちびり古の連歌の法
と定りしはずして今も能借今のも歌皆混合して来たり
也ゆゑに彼建治の舊式應安の新式ありて定りしもの
乃若師詞の西風もさへしてさへりたりしもの
のりもさへりたりしものばはる信玄と集りて一白とする
そのつらねも歌と云ゆもあつたりしもの彼はきき
と推して能借もまたありてさへりたりしもの能借の
き歌と云ふはのほち若付て輝けるあつたりしもの

彼宗鑑が天流波と名付能借の白とさへりしもの
早下りし事付けるあつたりしもの天流波の則も歌の
能借別れも歌と彼天流波の白とさへりしもの
付けるあつたりしもの其の白とさへりしもの信の
とも信のあつたりしものさへりしものみえりたりし
いも又鳥の後にても能借の白とさへりしもの
あつて連歌満座の及母のあつたりしもの
つらねも歌と云ゆも能借の白とさへりしもの

紅紫の夢をわらさるるかき神 仙吟

千種乃神曲くむのらすも 宗長
この端よ白雲かごの日出る 宗祇

又歌詠巴亭も歌後庭は榛乃らりまされ

しひものしとてあつとあつて 吉首

朽木穴くくしり於妻虫 詔巴

灯とてあつ板戸のゆめけく 昌七

あつのは是あつも歌うりせし 雜階されはつらつら

とくしあつあつとくくくくくく 首尾むとくくくく

そ乃伊勢あつ田の井宮蓋木田守武又の城あつ海よ宗祇

あつくあつあつてけ道あつとくも歌詠階乃たつらつら

守武は独吟の千句と綴りて宗祇大為彼と佐々木と

あつくとも歌詠とあつとあつとあつ 伏應安の新式和漢のは

夜とりてそ歌と守りゆりゆりお綴て松永貞徳の山傘と

りつあつあつとあつとあつとあつ 草よあつとあつとあつと

皆も歌乃式目とあつとあつとあつ 妙も是とあつとあつと

け道れくくくくくくくくくく ありあつとあつとあつと

くくくくくくくくくくくくくく ありあつとあつとあつと

綴りてあつあつとあつとあつとあつ 鶴あつとあつとあつと

付句は多分な成りたるもの道具付物やよめりや
るのむらひる白くはひりしうすしきもまじりけり
— 其中よもやとありて道は^{みち}きりし人もあつりあ
りやむの地帯と云ふ大切なるものありけりも唐
にも又辨之交らるるしきもあつりしきも今
ひりたりも姿をかへてありて自然と白梅の姿幽そ
よもやと云ふ句意又餘情はとびひりしきも毎句作ら
るるものありてありて術と云ふはゆめも情と云
らくは詩人も舟人も歌人も船もあつりしきもあつり
連歌のつれもなされたる付合ふは河の冷味はあまらびり
くしてのまじりて情と自由と云ふはさきもあつり
地帯にも冷味されしゆりてなされたるものあり
ゆめもやと云ふものありてありてありてありてあり
— かくにありてありてありてありてありてあり
ぞられはよもやと云ふ地帯と云ふ又ありてありてあり
る別と云ふはよもやと云ふ地帯の味なるものありて
しきもあつりしきもあつりしきもあつりしきも
長きものありてありてありてありてありてあり

あつと云ふことなれば貫之の集の中より二首くえ
らひて秀并と云ふなり

白くたのむらひぬあはれぬらふかたの母の愛とたふ
圓らふよ愛のあはれぬらふかたの母の愛とたふ
又疎白の事とて

鷲の居る池の行の春あつとたふおのらふらふとたふ
又き歌よ ことばをよむらふらふらふらふらふらふらふ
ことばをよむらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
親白の事歌の秋のくはは彼そまわらふことばをよむらふ

しらゆの秋の月つひのむすも 良乃

けふれと云ふことなれば貫之の集の中より二首くえ
らひて秀并と云ふなり
白くたのむらひぬあはれぬらふかたの母の愛とたふ
圓らふよ愛のあはれぬらふかたの母の愛とたふ
又疎白の事とて
鷲の居る池の行の春あつとたふおのらふらふとたふ
又き歌よ ことばをよむらふらふらふらふらふらふらふ
ことばをよむらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
親白の事歌の秋のくはは彼そまわらふことばをよむらふ
しらゆの秋の月つひのむすも 良乃
けふれと云ふことなれば貫之の集の中より二首くえ
らひて秀并と云ふなり
白くたのむらひぬあはれぬらふかたの母の愛とたふ
圓らふよ愛のあはれぬらふかたの母の愛とたふ
又疎白の事とて
鷲の居る池の行の春あつとたふおのらふらふとたふ
又き歌よ ことばをよむらふらふらふらふらふらふらふ
ことばをよむらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
親白の事歌の秋のくはは彼そまわらふことばをよむらふ
しらゆの秋の月つひのむすも 良乃

親白の事 有相の使 遣之 疎白の先相 實之 理之 深之 親
白の教 言語 法門之 度之 經之 疎白の禪 默止之 子之 惠之 親白
不ろ義經 是之 三教の教の中一はま如實相中道ホの如實相
まと教るは偏と云ふなり 疎白の義經 是ハ別教ホのま如實相
斤くつて教るがごとし 疎白の義經 中道ホの如實相と云ふ
等ホ乃 諸終之 又ハ海字終之 又ハ字と教るは偏と云ふなり

よありて教るるごとく佛智見とありて深きと云義といふこと
義いこれに翻して親の世諦有るに煩悩の輪廻の束
知るべし迷に識に生死白の第一義諦有るに煩悩の輪廻の束
小宗の疎白の空の大家のまづいふも初むの時の浅き
より深き大いりて深きより浅き出は是佛は諸道
の用公所需と云つり有極の奇道は相のはゆれ道
の無形なる後の捨棄と云ふことよ不念泥木の形像の尖
智より教るは縁を断れ絶するは法界より流るといふ一夫
事ノ因縁ふ事なりとあることりりごとく有る時の
法と説く人とは化交と云ふ三年終り人の眼とぬくも
稀こと説くとれ道有ありと親むるの疎白は
もとめは佛の法にありてある人とは其はくまの
も歌とをいりてはゆはるもつるべしと云ふ
ど唯法と云ふことし能清は教増え信のものありと明
案するやうにとりてそれら皆道よつて決不堪る
人のことありある人今れ能清なりとて歌の法式と云
てその法のとて守る事し於身らるる茶て
いふ連歌は能清の能清は其法とて其法ありと云

〇二

〇三

此歌の發句と體同といふは其時帝と徳久遠極
 よりいふはまゝのまゝにいふもいふも是は彼時帝と
 不遠いといふは二出のまゝといふは其のまゝ
 びゆるは心持のまゝといふは二出のまゝといふは
 かのまゝといふは一人のまゝといふは一人のまゝ
 いらぬまゝといふは花の落葉も同じまゝといふは
 まゝといふはまゝといふはまゝといふはまゝといふは
 まゝといふはまゝといふはまゝといふはまゝといふは
 海は西の海といふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 白くはまゝといふはまゝといふはまゝといふはまゝ

白くはまゝといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 りづゝといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 事しといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 と是らといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 を五七五の詞上中下並置をいふはまゝといふはまゝ
 味ひてといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 ぐといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 るといふはまゝといふはまゝといふはまゝ
 作らまといふはまゝといふはまゝといふはまゝ

古事本紀亦少なることおがえ始終おちのちあひま
まといふは作のま一人其意とあつたを
まいづるもあひま一人のちあひまの
すくえあひま一人のちあひまの
一人のちあひまのちあひまの
あひまのちあひまのちあひまの
と云也よりすなはち又あひまのちあひまの
云々也よりすなはち又あひまのちあひまの
後祈禱名は別道宮繪續が古事本紀古事

古詩経又ホタツク時よはらてあはれめとと事以
るまはらてあひまのちあひまの
まはらてあひまのちあひまの
ととあひまのちあひまの
くまはらてあひまのちあひまの
ととあひまのちあひまの
白くあひまのちあひまの
神祇事歌 大神宮は樂し 宗祇
同 雜籍 △たうとふあひまのちあひまの

釈教を歌 九つり九つりあつらへりて成成公教

同 此借 △心吹の色よりとけりぬ面火火舟舟

衣傷を歌 五月やとちりともこのもどろ武武云仍云仍

同 此借 △身よとくづらふれむお母のさ母影棠影棠

迷懐を歌 東よくくろし四巻をき世よらるらしくは時をりやどろ武武宗祇宗祇

同 此借 △しりしちりし世にぬれぬ袖袖園月園月

懐舊を歌 山上西の裁しむのさあま古きやもどろ武武宗碩宗碩

同 此借 △しりし世にぬれぬ袖袖園月園月

花後を歌 春つてけしめりうりぬ窓の竹竹昌休昌休

同 此借 △こころのちりし世にぬれぬ袖袖昌休昌休

祈禱を歌 けしめりうりぬ窓の竹竹昌休昌休

同 此借 雨よみりしちりし世にぬれぬ袖袖昌休昌休

名所を歌 橋をくぬ名よとくびり武武有指有指

同 此借 玉水やけぬとちりし世にぬれぬ袖袖昌休昌休

鏡別を歌 書よ詠風よ斬斬心路心路那那宗碩宗碩

同 此借 却もよひ京やたみたみ蠅拂蠅拂信徳信徳

造宮を歌 五よよむむよとくびり武武信徳信徳

同 此借 △五よよむむよとくびり武武信徳信徳

繪廣き歌

草馬ノ繪
わろふかおあそき乃拈糸糸 昌俣

同 能指

寒山拾得の繪よ
△あいの葉ハさるにけと糸とるが 道弘

碩 き歌

表原の種九ノ嵐のまよ
百とせよまらもまら千よ雲 宵栢

同 能指

しうくわのりて
△ふよぶよまるのりけら根さか 三箇

雨乞 き歌

そくまおらち雨とらぞこの根を 宵栢

同 能指

吹の目雨くうりりり
△ま田干凡民のまびらも雨やこめ 心号

隻 き歌

文と香も山は母りまこの橋下 昌俣

同 能指

△修ぶおれまの香け水柱 噴水

古事き歌

月ハ今細ととまらうと水 智徳

同 能指

巫山非也
△羨女乃来ておと抱りむ是 伴水

古詩き歌

輕羅ノ小扇輕手流螢
△袖ととともの白ふあ言ハ 宗祇

同 能指

又班娘婦因扇と依國
△ととともの風情日よ強固式 其角

意 き歌

らくひあよ妹よのり袖白糸 宵栢

同 能指

△筆のこも焼てゆるおねむきハ 多樹

追昔き歌

月くとびびらててせあまらじ 昌俣

同 能指

△くやとらふ人のさるれやらむと 大州

本流き歌

つくふやうりこれらうの心桜 宗祇

同 能指

△夏草や竹の子おあるれ 教

古号

明白もく入びつむうららかり 宗祇

同 雜借

△生れまゝくうのまゝく入びつむ 其角

毛被りよりの色紙

又紙被

空家まじりの南の色紙

同 雜借

△名月みひのびらう 又紙被

飛鳥

但三月移籍は 七もいと時あるゆわらかり 宗砌

「るは紙まにらうららとるは紙まの巻白うり 宗砌

鳥う一方とたうぬえてしからそれいさし 宗砌

と佐と河あひびとるは紙まを 宗砌

同 雜借

くれむやらうのも 宗砌

是の月乃飛鳥くれむやらうのも 宗砌

又限 カキ くれむやらうのも 宗砌

とるは紙まにらうららとるは紙ま 宗砌

加入ゆるは紙まにらうららとるは紙ま 宗砌

其らうららとるは紙まにらうららとるは紙ま 宗砌

べーけい 宗砌

てい 宗砌

ものうらぶおのりくく今味ひてとるべし今
時雜階の服とせんが葛の花の蝶の羽を北の啼けか
ごある類あげてとるべしとてあくのてとるべしと
くは又まごちとて物よらうすこ此別よとて後うの
服と又まごちとて作者もいと情なるのあられたる服よの得
らるる人おのり或は神祇教に夜場懐舊祈禱歌云ホ
の香ちあはる其をよとて味ひくごりあはるよとて
ぬもつとてとるべし又述懐の交ち出づるあはるの事
よとてあはるべしとて中意とすよとて是則人のんと

あはるの事とて一に遠付とてあはるべし但此の何の
船と述懐の心をよとてとるべし又換はれ交ちよとて換は
よとてあはるべしとて則服の換授とてとるべし余は約
よとてあはるべし今別の名実世とて服よとてあはる
よとてあはるべしとて宗也とて是に宗也とてあはるの何に余あは
よとてあはるべしとて交ちよとてあはるべしとて宗也とて約
よとてあはるべしとて服の年乃言と約つよとてあはる
たふとて是おのりとてとるべしとてあはるべしとて又
流木の交ちよとて服のけやう大事し余はとてとるべし

相射付とら本毒の毒を付むる柳と付らば
漆と付れは是れは射とらぬの毒と又神の力と

是れ毒也 名うたふらとらきたふらかみ

同服 卯のむちも毒や卯まらぬ

能指毒也 鯉のちる他物も此花の毒 定信

同服 痛うとらとらなる松うた 流味

是れと云ふもや射とらぬ本毒とらぬ柳まらぬ

是れ毒付とら毒もや向らぬとらぬとらぬとらぬ

同服 是れと云ふとらぬとらぬとらぬとらぬ

是れ毒也 是れと云ふとらぬとらぬとらぬ

同服 是れと云ふとらぬとらぬとらぬ

能指毒也 宮人もとらぬとらぬとらぬ

同服 是れと云ふとらぬとらぬとらぬ

是れ毒也 是れと云ふとらぬとらぬとらぬ

て打そとらぬとらぬとらぬ

。遠射とら西といふと東といふと

とらぬとらぬとらぬとらぬとらぬ

はらぬとらぬとらぬとらぬとらぬ

同服 同服 同服 同服

三十一

眼よ慈母をよむて云むらむれ味いと知る人

ま歌巻の 別れとて一却とておのまき處 宗祇

同服 別れとておのまき處のたのしみ 玄名氏

けいふ宗祇流りたあし海と若はあれづつこのことごと

あんと懐とのくらきくも迷懐のいとまきとて花を

かすまき一はぬあし付給りて

非借巻の 袂雲の樂いひいよ四五天 休三 聖峯

同服 別れの奥ハ東帯ハ公 休三 松家

あしとてまき付とておのまきとておのまきとておのまきとて

おのまきとておのまきとておのまきとておのまきとておのまきとて

おのまきとておのまきとておのまきとておのまきとておのまきとて

おのまきとておのまきとておのまきとておのまきとておのまきとて

ま歌巻の 別れかゝぬおまきとておのまき 親面

同服 芝生がくれまきとておのまき 同人

非借の けいふとておのまきとておのまき 系う休

同服 紫青えりまきとておのまき 同人

あしとて類とておのまきとておのまきとておのまきとて

あしとて類とておのまきとておのまきとておのまきとておのまきとて

三十一

一 申すは、
也歌書也 何らうて、或や枯ゆの板れむ
月服 則ちういしく、如く、
能清よ 自然のよ、れふ、
月服 烟の拾と、二、
是亦、類とす、
亦白く、
らるる、
六 或人同第、
此、
河と、
弟三、
き、
又、
第、
ら、
之、
上、

六 或人同第、
此、
河と、
弟三、
き、
又、
第、
ら、
之、
上、

めい...
どあ...
なぞ...
らん...
人毎...
大や...
とら...
時又...
弟三...
能階...
ニも...
乃五...
斥ん...
なま...
らず...
よら...
そが...
弟ニ...
天の...
も順

115

脇

第三

かきこけしあゝ言の胡明
同白ふりこけしけく梅咲く

宗祇 同

右巻のいふあゝ幽玄よ同出度と脇をそれ打そきて
は立こけし第三のさびくすまの海と風情を
巻の脇第三すまそていふよく是れよひなとこさくおん

同遊借巻

誰が舞をぞ年玉のせてよかりぬ

如琴

脇

いふも城下とまのりたまふ

宗重

第三

酒のよこ家ハ梅よけりぬ

如泉

あゝすまごゝとやうらぬらゝいほちりりゆ
八て巻もていもけり田舎らゝしてこゝろ又まきてい

巻

玉とくくこれ巻いさふおの松

廣順

脇

うらもけりおふ月心の心定

宣政

第三

かゝらあく板の床よ寝えり

昌隆

遊借巻

ねととくお巻よさめり富島

言水

脇

町ハ戸とくこもり入相

和及

第三

万歳がまふハ酔くさるゝ

我忠

でと借と不義とるんやあれはもよるゆも必
各別のりまけりてあゝおけりてせらでまの類き

眼 さまじい道子の様〜がゆ枝 目
第三 時 ちんちん袖のひらひらとて 目
けかぬあ〜して〜さあ〜の体ま〜の〜の〜
張るも夜めて〜の〜の〜の〜の〜
第三 ちんちん〜の〜の〜の〜
ゆ〜但〜の〜の〜の〜
絲〜ゆ〜但〜の〜の〜の〜
〜の切字の〜の〜の〜の〜
あ〜の〜の〜の〜

糸白 御中〜の人〜の〜 結尚
脇 づつたの里〜の〜 宗因
第三 夏夜りせとや雨の〜 玄由
排借糸白 池の〜の〜の〜 鉄原
眼 春〜の〜の〜 目
第三 冠子羽の極〜や袖〜 目
〜の〜の〜の〜
よ〜の〜の〜
脇 ぬけ〜の〜の〜 畠佐治

七

七

第三 折るふの歌の音らへん世の

能借者 くらゝのちも歌をいせての年男 習志

脇 ぬぐさうとてうらまへん 我人

第三 今日つむを腰きうのうらま 同人

第四 女はては外とあらと同一く上は疑字下はの詞をい

まへうの決けくうくはまよと城のちのうらま

のちあゝいさ歌あも能借ものまへんいさものこ

脇 折てお概のちりりうらま 畠山

第三 おおじとふ第取とあら道は 組白

能借者 七穴や目いりせひけて具路 徳心

脇 年うらまへんいさ年一はるま 琴心

第三 松橋中めとがうの校あ 角橋

第五 顔めはれらるうらまはうらまの者いさ只の三字

うらまへも歌いあらうらまは能借よらせうま

七 四句の事

右の脇第三すまへ詩のしく起承轉と續きまれ

つてあはれ其のうらまは例は起承の脇は其をよ不肖所

義のうらまはうらまはうらまはうらまはうらまは

雜譜第三 小姓^{コシヤウ}天^ヒ鷲^{リウ}毛^モ杖^ヅの^ノ毛^モ巻^{マキ}と^ト申^{マウ}

同四白^{ドウシヤク}め おそ^{オソ}バ^バび^ビう^ウら^ラん

第三 文^{フミ}香^{カウ}と^ト申^{マウ}た^タよ^ヨく^クは^ハら^ラひ

以^ヨる^ルに^ニ白^{シロ}め ま^マれ^レき^キ免^メれ^レく^クは^ハや^ヤぬ^ヌは

雜譜第三 葉^ハの^ノ毛^モ異^イい^イま^マの^ノ毛^モ申^{マウ}

同四白^{ドウシヤク}め 白^{シロ}く^ク草^{クサ}一^{ヒト}の^ノ法^{ホウ}

第三 毛^モの^ノ水^{ミヅ}の^ノ毛^モ申^{マウ}と^ト申^{マウ}て

この同四白^{コノドウシヤク}め 白^{シロ}く^ク草^{クサ}一^{ヒト}の^ノ法^{ホウ}

雜譜第三 新^{シン}鳥^{トウ}と^ト依^ヨる^ルの^ノ法^{ホウ}申^{マウ}す

同四白^{ドウシヤク}め 舞^{マウ}と^ト申^{マウ}た^タれ^レて^テ申^{マウ}す

者^{モノ}の^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

う^ウら^ラひ^ヒの^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

ゆ^ユら^ラひ^ヒの^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

て^テの^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

ふ^フら^ラひ^ヒの^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

よ^ヨら^ラひ^ヒの^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

も^モら^ラひ^ヒの^ノ毛^モ申^{マウ}す^ス可^カい^イと^ト申^{マウ}す

⑧五白^{イチゴ}く^ク草^{クサ}一^{ヒト}の^ノ法^{ホウ}

第三

四白り

五白り

能備第三

同四白り

同五白り

但四白り

第三

同白り

五白り

能備第三

同四白り

同五白り

第三

同白り

五白り

能備第三

同四白り

ふ定のひらひら月夜に

吹けらゝるは風もき

おくの葉れもさつはまうまじ

百姓のまひらく日知のま

階さへ疎お猫の所あり

横窓と横の首の入り

但四白り

一階のりらるるひらき

たつらるるの月もさ

清のまらるる人はい

物茶籠千枝はま枝折れて

向よひのりらるる新

伎織のまらるるあり

まぐれともやの鹿は

庭よりらるる色まの

氷と池のまらるる

御かたのりらるる

庭園のりらるる

あつた暑

暑

あつた暑

あつた暑

あつた暑

暑

あつた暑

あつた暑

あつた暑

暑

あつた暑

五

六

日女あり 後上筆 聖峯乃 柳雨 常矩

右の白き雲のしほりてはひかしておのほりなる

九 六のちの吉人 賜つてくち候くとらふ是れおのほりて服

つてくちとらふはらるるまじく是れおのほりてくちの文紙をてと

法とて新筆解と法とてと教へてとすくちのしほりて

もまそとてまほりてくちのしほりてくちのしほりて

れくちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

とありてくちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

くちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

法とて新筆とてくちのしほりてくちのしほりて

四のちの空りてくちのしほりてくちのしほりて

も款雜借の白白又の卒十の首尾おのほりてくちのしほりて

拙くちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

とよりて輪廻のしほりてくちのしほりてくちのしほりて

ひくちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

らくちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

十 七のちの五のちのしほりてくちのしほりてくちのしほりて

お末みくりーをいりーとくちひりりんの作意う
わくくぶとーこれいじりー今のわくしぐく書けらる垣も紙の墨之

①古くは作者次第不用

夏 撫子や、夏臨れ原の落しき
夏 笑ハあはれらうらうらの花か
頃乳の板とくころり、夏野か
登うかよまつら源じあこれ
わくく書けらるわくく水車
翡翠れみふけとあ、牡丹
紙筆會やあしーてり人のふ

夏 守武
夏 貞徳
夏 重頼
夏 樹也
夏 宗周
夏 吟笑
夏 万峰

打水ようあをぬれ、扇か
る年の行や箱根表若信水
垣ゆいけ行のみそく、牡丹
歩若指鼻息さー夏木之
高会沸、味も信も介
舟の笑や去道はあおれ紙の面
益く、酒のうすれぬらう、
世はあはれ、道ゆもあつた
鴻来や鳥さ、日く、若扇か
若茶小盃、一、酔味曾、

夏 巴笑
夏 扇月
夏 吟笑
夏 羅心
夏 扇
夏 深下
夏 友也
夏 友元
夏 吟笑
夏 方白

鳥のつらま虫をみるにふもつら
 業平の三景河たう一牡多
 口縁の河筋の縄を以て暑者
 なる軒（作）こころあつたるの
 涼しき糸（疑）を以て水車
 去ふ柳のそよよを以てわらわ
 ともきこふのそよよを以て
 ひびくや海を以てまると出づ
 下をどるごころを以て天狗草
 物故の都事知るる備の山

右 一矢
 伏陽 扇
 伏陽 山杭
 同上 月
 山崎 湯田
 山崎 氣温
 山崎 其角
 山崎 尚白
 山崎 鞆石
 山崎 山船

磯城の磯くさるる泰山石
 花あつたむゆの海を以て
 桐そらけ侍町 春 尾 合
 つまてゆかふあつたも妹の
 猿の子ようご丸入とあ年
 鴨はくや天の川原也 法造
 賣家の雨戸明も一徳養
 疾を以て者賣の縄火のそよ
 世竹の意よくひこひつこ
 洞竹守死あつたよ居るそよ

右 吟笑
 大坂 春山
 大坂 扇名堂
 大坂 休斗
 大坂 山
 大坂 雷子
 大坂 合結
 大坂 合結
 大坂 合結
 大坂 友元

若くはわづらひのつらき事なれば
 紅島や火をかよなほ燈の香
 魂糸り婦へけりいひせりりり
 ちゆのまゆゆれせんまゆゆれ
 石出て飛ん付しりゆゆ小
 及巾とり襟けりゆゆゆゆゆ
 ぬまゆり幸ゆ人のゆゆゆ
 定くくまゆゆゆゆゆゆゆ
 櫓くくゆゆゆゆゆゆゆ
 くら桶や海の人ある事こじ

素の 友元
 任嘉 秋風
 伏湯 枕
 伏湯 十人
 素の 泉
 如 湖
 素 珠風
 如 素
 如 月
 如 列

ちやけりゆゆゆゆゆゆゆ
 仮指やゆゆゆゆゆゆゆ
 味あゆゆゆゆゆゆゆ
 袖肘もゆゆゆゆゆゆゆ
 ちいゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ちある年の頼ゆゆゆゆゆ
 ち雨やゆゆゆゆゆゆゆ
 人の氣ゆゆゆゆゆゆゆ

丹後 吟笑
 伏湯 国目
 如 初扇
 如 西吟
 素 西成
 素 西成
 素 西成
 素 西成
 素 西成
 素 西成

元日ハ大海日をもとく〜うへ
 らひ死て海の上りて天候り
 日と會ひ石よりひりて胡蝶の
 尾寺や法とありまきそ〜一夏
 ちるむよ佛やかんとさる〜
 物よわ〜かき非め〜い鬼瓦
 後門の権〜お〜か〜よ〜ねの者
 九道のあ風の根り〜や東心
 理も丹や芥の根もた〜く蛇
 衣文字や花〜〜よ〜〜と心

母^{あつ} 吟^ふ
 春^{はる}
 伊丹^{いたん}
 母^{あつ}
 大坂^{おさか} 万^{まん} 煉^{れん}
 郡^{ぐん}
 母^{あつ}
 伏湯^{ふつゆ} 接^{けつ} 衣^い
 母^{あつ} 雷^{らい} 子^こ
 伏湯^{ふつゆ} 百^{ひゃく} 白^{はく}

七草 母^{あつ} 笑^{わら} い^い ち^ち ぶ^ぶ や^や わ^わ げ^げ と^と 口^{くち}
 伊^い 塔^{たつ} 高^{たか} り^り 却^{さか} ち^ち ち^ち 人^{ひと} 也^や 夢^{ゆめ} 皇^{すめ} 雲^{うみ}
 栄^{えい} の 戸^と ぬ^ぬ 鞠^{くま} 坐^ま ち^ち の 子^こ 外^{そと}
 元^{もと} 日^ひ や 珠^{たま} 子^こ と 人^{ひと} 身^み 柳^{やなぎ} の 心^{こころ}
 お^お の^の ひ^ひ か^か ま^ま ち^ち も^も ち^ち と^と 柳^{やなぎ} 外^{そと}
 一^{いち} 遊^{あそ} ち^ち ら^ら ち^ち も^も ち^ち ち^ち も^も ち^ち ち^ち 未^み 移^{うつ}
 物^{もの} の^の う^う ら^ら も^も 明^{あきら} 備^ひ 知^ち 備^ひ 知^ち 備^ひ 知^ち 備^ひ 知^ち 備^ひ 知^ち
 目^め 服^{ふく} ち^ち も^も ち^ち り^り 入^い る^る 衣^い 履^ふ 十^{じゅう} 人^{にん}

友^{とも} 用^{もち} ト
 友^{とも} 友^{とも} 元^{もと}
 言^{こと} 水^{みづ}
 衣^い 幸^{さい} 依^い
 戸^と 未^み 見^み
 衣^い 力^{りき} 磨^ま
 友^{とも} 友^{とも} 元^{もと}
 十^{じゅう} 人^{にん}

右

左

見おぬ服の中心にちりてりあはれつるあざのまじりひり

のうらむとまふくしゆを

①成人同賦物之事

。ほちの賦物^ヲ為題或百句或五十句ある用賦物^ニ一節^ニ表^ス

近代教句^ノ斗^ニも賦物^ノは所^ノ所^ノ脇^ノ白^ノ下^ノ高^ノ最^ノの^ノ流^ノ以^テを^レ給^フ

聊^ニ不^レ忘^ル舊義^ニ而已^シ。是又^ハ好勝^ノの^ノ類^ニ

是舊式連歌^ノの^ノ阿^ノを^レ賦物^トと^レ頭^ヲサ^シも^ハ百^句ノ^ノ用^スる

也又^ハ表^十句^ノ用^十句^ノ尾^今新式^ノより^ノつ^くとも^ハあ^らず^になり^に

用^事も^一も^ハあ^らず^になり^にて^ハあ^らず^になり^にて^ハあ^らず^になり^に

捨^レり^にめ^りし^にめ^りし^に

賦^ハ凡^クて^ハの^ノの^ノ備^ハる^ル事^ハあ^らず^になり^にて^ハ其^ノ取^レり^ハ又^ハ多^ク句^ノより^ノなる

或^ハ十^句より^ノなる^ル又^ハ百^句より^ノなる^ル賦^ノ十^句より^ノなる^ル亦^ハ

か^のめ^くて^ハし^を賦物^トと^レる^ル舊式^ノより^ノなる^ル亦^ハあ^らず^になり^に

ら^しめ^りて^ハ賦物^ノ者^ハ白^ノ下^ノ高^ノ最^ノの^ノ流^ノ以^テを^レ給^フ

至^レ給^フ賦^ノ字^ハあ^らず^になり^にて^ハま^らず^になり^に

賦物^ノ字^ハ古^ノ白^ノ中^ノ不^レ記^ス中^ノ以^テ表^ハ八^句斗^ノ事^ニ

近代^ノより^ノなる^ル亦^ハあ^らず^になり^にて^ハ今^ハ第^三句^ノ斗^ノ事^ニ

字^斗敵^ス之^トい^ふ今^ハ第^三句^ノ斗^ノ事^ニ

と^ハら^ず中^ノ以^テ表^ハ八^句斗^ノ事^ニ

十一

十一

扱發ちと書留ふ近賦物と定じ扱とハウノ中ニ賦物
字とくハウノ人あれ今ハ一巡回て海ニ賦物と云ハ
まらりハウノ人

賦物名

何路 何本 何人 何如
何夕 何日 何信 唐何 何何 何何
何下 何細 何半 何明 何何
何水 何至 何不 何由 何草 何多
何る 何文 何子 何公 何表 何文 何物

以上五尚ノ内
宛テ用ク

此ハ舊賦物改定ノ數多ク出テ不宜者畧ス

何世 千何 五何 以上 新儀

○又ハ一字者ハ 二字通言 三字中畧 四字と下

畧ホシ 但一字露ル賦物ハ近代モ百ハキ故ニ毎ニ

其用之むニ其自ニ字通言ハ下賦物ハ千ハキ故ニ取

○一字者ハ 日と火 蚊と番 名と菜

○二字通言と云ハ 軒と繩 夏と繩 水と罪

讀ニ字者成テ新字類ニ それと通ス

○三字中畧と云ハ 鹿と紙 葛蒲と雨 柱と唐

カスミ

カスミ

カスミ

此外三字中 畧の字と下畧の字と 二は交準と後
又交の字の中 二字後のみと云ふ事と云々の類と
白の中のみと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
附夜と云々と 朝^{ツクヨ}何と云 附^{ツクヨ}と云々と 夕^{ツクヨ}何と云
は類いふ事と云ふ事と云ふ事

又交の字の中の二の字と云ふ事と云ふ事と云ふ事
概しと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
又賦物よりの字を付て云ふ事と云ふ事 榊^{ツクヨ}頭と交の字
何の時又賦物よりの字を付て云ふ事と云ふ事と賦物よりの字

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
又賦物の字^{ツクヨ}と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
何^{ツクヨ}白何^{ツクヨ}と云ふ事の中よ 悉^{ツクヨ}や 布^{ツクヨ}と云ふ事何^{ツクヨ}白^{ツクヨ}何^{ツクヨ}白^{ツクヨ}
と云ふ事の中よ 從^{ツクヨ}又賦物の字と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
舊式の表^{ツクヨ}は表^{ツクヨ}十^{ツクヨ}白^{ツクヨ}と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

忌々義之継借は舊式ありて是教新式ハ法と
借りたる義ナキ秋ハ舊式ヨリテハ次ハ賦物ト云ふ
及々云々ニテハ其者ハ是秋ハ百句ノ時ト又云
ハ何ハ賦物ト云ふ及々想懐舊^高短又者号^追吾^あと
是秋ハ賦物ト云ふ或ハ夢想ハ連^使懐舊ハ是秋^をト云々此
義ハ亦ハ是秋ノ所ヨリト云々其連^至れ^越と^得作^は
事^もト云々又^又頌^のか^こト云々其^名ハ^あと^是秋^ハ賦^物
ト云々頌^ト云々^ト是^借ト^とわ^てハ^継借^の二^字則
頌^之類^ハ是^借ト^是秋^ト事^も其^ハ及^及想^懐舊^トは

月一ノ準するのまれの賦物と云ふ及々云々
のまのまのあは^次継借ハ賦物ト云々其^意越^ハ者^真徳^云
而^と云々^何ト云々^もて^とた^は是^秋継借^法今^是秋^継借
と云々^ハ別^くれ^者と^云は^れ此^別ト云々^ハ別^くハ^別借^之
借^之二^字と^併ト云々^ハ別^くハ^別借^ト又^ハ其^名号^ハ追^吾其^時ハ
其^ハ彼^夢想^懐舊^高短^又者^号追^吾其^時ハ
及^及想^懐舊^高短^又者^号追^吾其^時ハ
併^ハナ^リト云々^ハ其^名号^ハ追^吾其^時ハ
併^借ハ^賦物^ト云々^ハ其^名号^ハ追^吾其^時ハ

歌師集の事能借と興りつづつ能借も此二字
も中書事してらし

右にゆくハ同義を能てらんてきつては席
は随ひく賦むらゝちあゝぐべ〜又能借も歌
強依あつてもくる〜かゝる能借も如生和歌のこ
けし層まれば能席能より〜能事との能く〜能意地と
きとんとて又はつ〜能て氣色がゆ〜能凡徳と
あ〜能子ぶ〜能量て賦物の字も〜能男意〜能とらゝ
ろ〜能也も〜能也〜能も〜能は〜能ち〜能也

義もろ〜能も〜能能借之賦物の字は連歌のどく
五ヶ以下小賦ホと立も〜能も〜能や〜能度交りも能ひ
て〜能〜能興も〜能字も〜能也〜能や〜能席能も〜能て
も歌のど〜能の賦物とら〜能も〜能も〜能さびく〜能〜能
是能借也能から〜能も〜能能の〜能も〜能能の〜能
能借之賦物字と〜能或ハ連歌の〜能松唐去〜能とらぶ
能借の〜能節去能去〜能〜能〜能〜能能の〜能能の
能船と〜能〜能能船能茶船と〜能能借も〜能〜能餘ハ
可準之但又一字去歌中〜能能の能歌〜能能二字

返音の下の千の連歌よるんでいかにいかにいかにいかに
 よるに死にあり多分一は之雑音よるかにいかにいかにいかに
 三字の中畧もどいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 手のいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 美事いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 よいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 音三字中畧下畧四字上下畧中二字畧五字上中
 下畧中三字畧一字借音三字除篇除篇他は

けおの注意ありいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 雑音ありいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 句は随ひいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 み返事カコフ三字いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 のいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 一字露れいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 類之三字下畧ハカと人といかにいかにいかにいかにいかに
 中畧ハカといかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 五字上中下畧中三字畧あり準ていかにいかにいかにいかに

正

正

一字傍書ハ代ハひみぞへひめする付け代ハ字と傍
て^カとまうしむ白れ中の音と一字傍^カ一字書^カ終
以^レれど^カ音と傍と並^レに訓^ラの^カ後^カら^カ二^カ字
除^カ篇ハ^カま^カし^カる^カ中^カは^カ糖^カと^カ字^カり^カが^カた^カ篇^カと
除^カと^カつ^カと^カつ^カリ^カノ^カ割^カれ^カて^カ松^カあ^カる^カる^カあ^カる^カ明^カあ
ら^カ月^カよ^カなる^カ也^カ除^カ冠^カ除^カ當^カも^カ皆^カい^カて^カあ^カひ^カら
は^カあ^カる^カ他^カ注^カと^カら^カ白^カ中^カは^カ毎^カれ^カ字^カあ^カる^カが^カ本^カと
派^カて^カる^カが^カ一^カ樹^カと^カある^カは^カわ^カの^カ是^カよ^カあ^カる^カて^カあ
る^カ一^カ名^カも^カあ^カる^カも^カあ^カる^カ一^カ百^カ白^カ又^カ十^カ白^カは^カ九^カべ^カる^カり

ある方の時ようにばとを先を先と云々也

此外は歌へ一随ひゆらぐらぐらあるもよと云々と終る耳

(十四) 本或連歌ハ其再能借ハ移と云

項日能借ハ本式と云ふそのかあひまのわいも人
るも一ぐ板りあてしてあるといふは一は意と云
ぬのゆると是と極と云ふ人はいかたしとあひま人
のまのなまづ一其心と云ふは本式の本式はあ
あらりて真の能借と云ふはあひまのあひま
今もあひまれども秋に本式と云ふは本式と云ふは

一

一

一、新式に於ての本式に本式ありてあり新式と云ふは式
同本心清水寺より始りて今とて本式同と申ひしは
之是じう一の式同之の舊式と云ふは清水寺と云ふは
用ひしは一人あるべし一永祿乃以此式六段の普門院あり
與り乃り紹巴とて出座とて之後傳是を後継りしは戸
あしく本式に建治二年は字多た
の字於蓮會後谷を相つ作と
う、同此又中納言為者卿作始りてありと後普光園ハシ持
政良基公ニ系有應安八年より改め書加人始りて新式と云
建治二年より應安八年までと後後常母寺同白藏良公ニ系有
九十七年よりありと

宗道宗初より相候し好ひて享徳元年は日室の
字より本式あり
給ぬと追加と号と應安八年より享徳元年と
八十二年とありとと後普光杜母を
勅とて道遠院ありと相候乃りて文龜元年は柏原の
字
書加人始りて新式とありと書と享徳元年より文龜元年まで
五十年とありと
是今より新式今案とて用ひしは式之但此式ありと若くは
説と唱へ改め奉りてありと書と加人始りて新式
り多傳史ありとていふべしと文龜元年より
元禄十一年より元禄九十八年とあり建治二年より元禄十
一年と四百廿二年とありと

連歌舊式之法

初め表十句毎句念後句賦也。真百句俱合正説至第三句
。各處不厭仿表。各處与各處隔五句。ツ子三句ハ三句也
。同季隔五句中無他季則不為之。連續二句亦不抱。
。月夜松舟菱田竹烟若隔十句。若ノ一ハ三句也
。景物不守連續二句。景也亦景物隔二句。何多ノ景景是ハ
ツ子ナカシ
。隔也と隔也隔二句。ツ子ナカシ。變體也草及同句。む西季ノ景景又
不ともナキニ連
。松檜原岡榎俱。為五類。各段ノ裏六句
。花八句。此外ハ如應安新式。相身ナクツ子ノ三句也ス

此越彼是十ヶ條餘連法ノ式同應安ノ式同ノリナリ也
以外ハ皆應安ノ式同ノゴトクノリ也ハ舊式と月終志
終ナシメテツ子ナカシ也也。新式トテ本式新式トテ別
分明ナル事也。雜措トシテ本式ト云事ハ云々也
。ツ子雜措ト新式ナリ。是舊式ナリ。是也。ナリト
。ツ子雜措ノ式也。秋ノ和漢ノほとろりナリ。事ハ其
本式ト云々也。又連歌ノ舊式トナリテ云々也。ナリ
。是ノハ。ツ子。ナリ。新式ノナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
。式ニ雜措ビテ。本式ノ式ニナリ。ナリ。ナリ。ナリ。

三十一

三十一

例より事柄を執つてあらはれしむるに於て此種舊式
立くらんといふも今此種舊式は昔の式よりはま
彼是ゆへに事柄を執つて連歌は舊式の類と
捨して事柄を執つて用ふる事あるべし
あらばある人ゆへに此種舊式より此種舊式より
捨つた人ゆへに此種舊式より此種舊式より
ゆへにあらば事柄を執つて用ふる事あるべし

○表十句但事二事とて合發句賦物

○表十句但事二事とて合發句賦物

○名處不厭作表。名處と名處。但此の句は名處の句は

○同季隔五句。中ニサ他ノ事則ハ不為之也後二句ノ不抱

但常連二句の六七句去し考へ此種舊式より五句之類

定めゆへに同季二句をとり定むるに中ノ他の事

と入るは事あるに二句の六七句の類は入るに五句

例も歌よ打越種も此種舊式ゆへに事柄を執つて用ふる

用、新式

月を毎夏同竹烟各隔七句常ノ事同竹

烟ホ七句去し又常の此種舊式は事柄を執つて用ふる各別

○表十句

○表十句

こ夏かしくちるさ

。乾みまきし。三幸づす。いも回わらう。
表裏うら。も其うら。いも。いも。いも。
おしらわう。いも。いも。いも。いも。
わう。いも。いも。いも。いも。いも。
いも。いも。いも。いも。いも。いも。
いも。いも。いも。いも。いも。いも。
いも。いも。いも。いも。いも。いも。
いも。いも。いも。いも。いも。いも。

免あくてもわらう。いも。いも。いも。いも。いも。いも。

。景物不可し。いも。いも。いも。いも。いも。いも。

。隆地と隆地隔二句。いも。いも。いも。いも。いも。いも。

いも。いも。いも。いも。いも。いも。

。純物。草と木右回し。いも。いも。いも。いも。いも。いも。

。様。櫓屋。周。様。いも。いも。いも。いも。いも。いも。

。各残ノ裏六句

いも。いも。いも。いも。いも。いも。

夫或人同十神之事 其神之神種之新古人之所
 異 其十神之神種之新古人之所
 由之よおれ出るるをみてしう 其十神といふは
 つくし教とてあつては 其大教とては 其名目あり
 とすのしゆるき教とては 其神とては 其名目あり
 宗族とては 其十神とては 其八神とては 其十神とては
 連教あり十神はつとては 其宗族あり 其意あり
 と教と別入の勢 不可しとては 其神とては 其名目あり
 其神とては 其十神とては 其神とては 其名目あり

分してつるるをよめられも 其神とては 其名目あり
 とつとては 其神とては 其神とては 其名目あり
 各別あり 其神とては 其神とては 其名目あり
 其神とては 其神とては 其神とては 其名目あり
 人ともしつひり 其神とては 其神とては 其名目あり
 勅定あり 其神とては 其神とては 其名目あり
 其神とては 其神とては 其神とては 其名目あり
 と完 其神とては 其神とては 其神とては 其名目あり
 其神とては 其神とては 其神とては 其名目あり

大やう連歌の十辨と定めおれきと故とて人に
あつたは是よ準し一申辨結もくらす

為云辨連歌

袖と名とて名乃三つは

。まはつて人おるはれまよきみ

。こゝにほをさしひ一奥山

。かゝるもふじとらぞびとぶ果敢る

故郷とあはれとて人の程とて

。疾く風よこちとてしつて

順気

故母

故所

辨結よ

鶉乃とぶつとふもあつて三月

△沌水よとてしつて人の程とて

うぞかゝるにあひびとて

。まら雨よあつてしつて人の程とて

。あつてしつてしつて人の程とて

。うれとてしつてしつて人の程とて

日とてあつてしつて人の程とて

。あつてしつてしつて人の程とて

あつてしつてしつて人の程とて

殊妙

順気

因乃

信照

長言辨

辨結

有公躰

△八十の姥酒のみちのこまびらよ 系 如泉

秋きさのひらきさの夕ぐら秋

○幼くては川に田まがうー 秋保

ぬーいせかーの船がさか川

○あう海より津のこころはなをた 秋保

是より人の数ささくあやき

○あう後れ世のねの夕ぐれ 信玄

あうくくくさうあうん

△凡と安水入て思うこぼるあ 系 和及

濃躰

水やのかりてあうあうん

○あうれの小うふささむの枝 信照

こぞより人の数ささくあう

○このうまうさうのうらまうそ 秋保

こぞ若くまうこま向てぞあう

○志げが居れそのこまま 信玄

泉水涼く限のうらま

△唐つめはぐを並まはれ松ひひて 系 幸伝

月をむらあ求あうい

西麻作

池橋

○三徳野のこころごとく
三徳野のこころごとく

泉湧く春風をゆく

○信者乃海の面は月とえて
信者乃海の面は月とえて

ゆる雨もこころごとくぬきぬが

○こけやいりれ好とらうん
こけやいりれ好とらうん

信者
百日の教を急る急のうら

△佐れ糸く白柱乃虎
佐れ糸く白柱乃虎

面白
末末よりかほ輝の白き

こころのまをりしより月出て
こころのまをりしより月出て

をいらくも世ののれあふ

○まがらみのまいふとごあう松で
まがらみのまいふとごあう松で

いふいづもあふくやゆら

○輝まの嵐の房は人位く
輝まの嵐の房は人位く

光緒
えとすよ二つわりの爆

△繩まくしてごとく糸やとれ水家守
繩まくしてごとく糸やとれ水家守

事
人女よりまうん道ごとくあは

○花乃は木のりぬき花まは葉
花乃は木のりぬき花まは葉

らもる公ははらやもん

○身と捨る業は 宿や又燈 信照

まらあやめれしうらなひのやうに

○船のあやめれし水しとくくち 吹乞

葉茶まに綿とまじりわらう

△鳥をとりおぬ鶴煩ふと人分て 一 家思

俵れいらの袖のうら杖をよぬ

○何ゆ人よりのほうこころのま田川 信照

まの日記しにるるそまよなり

○あまそとくま一命といふれ去 救母

ま野とそ水野よ漬くまよまれ

○まにまにまのうらまを流しつ 大佛

うらまのうらまをうらまにまよ

△まにまにまの隣のまよとまよまにま 相和

まよとまのうらまをうらまにま

○うらまの根に人れ結るもゆりて 須美

いらつらうまままのうらまに

○結るうけのまよとまよまにま 良川

うらまのまよとまよまにま

船借ハ

一節体

船借ハ

写古神

絶頂

〇絶頂の峰はくも川にのみ 音の

つゞくと糸はまは枝のうら

〇つらぬ流は顔とかくくうひ 其角

強力体

〇つらぬそ國のちとめとふあ

〇かぐしは娘が田とらりらげて 圓乃

〇かぐしはらこもるうづら

〇いれぞ此神代久しき宮に 救母

〇食らも人のまごみづら

〇老れなつらふ世友のみとたて 十佛

絶頂

〇霜月や海ははくくあひあて

〇七

△冬の初日つらくもあうまると 枕を

〇但此の初も体 廻る体は 幽きうらてかき出る 縁は

かかれば遠くはるるべしや定家卿と 幽き体と云うと

尋らの中は落ぎの月と若くはうらひを言はれ

よあまよふまよしして初は外は面白き面影のうら

ひそあらん尋と初も 廻るの体と云ふは 後成卿も

アされしとせうはひけるれ又古人の初よけは 幽き

体と申あめのかよとらて 終りしゆるるいふいふ

乃由よし... 大やういぬちうさく... とおもひ... 人々... 貴族... 云神と云く我

ら... け長... 長... 作... 作

ら... と... 命... の... 撰集... 乃... 故... 作... 長...

中よらうらうら母のやうにきりきり〜
舞臺舞臺天性な〜んが舞臺なる〜
あ〜んぞ〜ん海神とら〜んた〜ん〜
うらうら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
あ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
信〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

舞臺舞臺天性な〜んが舞臺なる〜
あ〜んぞ〜ん海神とら〜んた〜ん〜
うらうら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
あ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
信〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜
おら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

舞臺

舞臺

味りてしめたるもくしつとてし結キしらしとちたみ
らし事ありんし一茶の味しんものよみんた衣結と
舞でしんものしんものさう合付ぬやうあそもト平
を付しんものさうしんものしんものさうしんものさう
と古人のしんものしんもの類し青衣と米白とすし
あひとすまししとえゆるしんものさうしんものさう
のしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
又西民のむよさうしんものさうしんものさうしんものさう
さうしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
とさうしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう

軍法と立るる先う敵のぬきる人れ強^シ敵とよくしらがり
アしてえらりとすれめぐしんものさうしんものさうしんものさう
身強^シあはしく敵の怒を知しむしんものさうしんものさうしんものさう
かりしんものさうしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
てしんものさうしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
き事し奇人の法をゆるしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
てしんものさうしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
能^シ借も茶白へのしりさうしんものさうしんものさうしんものさう
①八 追加者よかよ体あましんものさうしんものさうしんものさうしんものさう
。有よまどくしんものさうしんものさうしんものさうしんものさうしんものさう

ようきにも別人と好く不^レ交^レる^レは^レ是^レ不^レ交^レる^レ又^レ明^レ十
 四年土月以^レともや放^レ大^レ原^レ十^レ如^レ院^レ若^レ白^レ付^レ二^レ此^レ宗^レ祇^レ宗^レ在
 揚^レ井^レ元^レ佐^レ之^レ互^レ之^レ白^レの^レ意^レ未^レと^レ同^レ答^レる^レら^レう^レれ^レ白
 一^レ若^レ神^レと^レ揚^レ一^レ竹^レ一^レ幸^レ一^レを^レ但^レ先^レハ^レ彼^レ哥^レの^レ十^レ竹^レ此^レ竹
 一^レ若^レ神^レと^レ揚^レ一^レ竹^レと^レ分^レら^レれ^レゆ^レ一^レ哥^レの^レ作^レは
 夫^レの^レ分^レあ^レら^レば^レく^レの^レ一^レ竹^レと^レ分^レら^レれ^レゆ^レ一^レ哥^レの^レ作^レは
 舞^レ一^レし^レ舞^レ人^レ幸^レと^レハ^レ徳^レ退^レの^レ竹^レり^レ好^レく^レ不^レ交^レる^レと^レ云
 給^レふ^レ知^レず^レど^レこ^レよ^レ甚^レ分^レら^レま^レぬ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白 これりとはと何とハせん

主人作 賦^レと^レ心^レの^レ甚^レ分^レら^レま^レぬ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白 聖人唱^レか^レの^レ而^レれ^レタ^レタ^レレ

お白作 舞^レの^レ分^レハ^レ別^レ等^レは^レ甚^レ分^レら^レま^レぬ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白作 待^レ時^レハ^レ幸^レ乃^レ別^レと^レ分^レけ^レる^レガ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白作 う^レき^レこ^レも^レハ^レの^レや^レと^レ分^レも^レ知^レず^レ

お白 む^レよ^レじ^レふ^レと^レ分^レれ^レる^レガ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白作 とう^レく^レれ^レ人^レや^レと^レ分^レれ^レる^レガ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白 玉^レと^レ分^レき^レる^レハ^レ分^レれ^レる^レガ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白作 秘^レ分^レら^レく^レ甚^レ分^レら^レま^レぬ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白作 云^レち^レ分^レれ^レい^レり^レと^レ分^レれ^レる^レガ^レ一^レ竹^レと^レ少^レく^レ知^レず^レ

お白 會^レよ^レは^レこ^レり^レり^レお^レの^レ侍^レ

〇三十七

〇三十七

於分作
又臨作云

くものごとよ海うくかやまの雲

忠辰

一系作

晴むかあち雲のこくちく

之辰

あ白

たのむしあれお木の所を

えん作

肩袖をたをきく後おちうて

忠辰

あ白

にのまをゆくはてしとけ

一系作

かちまれちりお髪とさきふし

忠辰

あ白

水着ふりいんそうた

二系作

かき人を遠く捨まは神ねかく

曰

あ白

らうたれとのうらら名

一系作

風まてこまきゆりたおもき

忠辰

二系作

持ちうらうひいさちうくまこ

忠辰

あ白

まきこまきしひのこまき

三系作

くしうれ山をゆるけはま

之辰

あ白

ねーやとくらぬかまき名

四系作

いほもはぬれぬよとくひく

忠辰

五系作

たのしとたははのりたをまればや

忠辰

あ白

まみりうらうらあけは

六系作

まのゆる雲より奥を塔をたし

之辰

あひ ちかひのしきよきひのあつた

おぼし ころらふまふこころの山里よ

之作

あひ さらぬかたうしひりやん

あひ ともをよまれさきりるの夢よ

之作

あひ ねとらぬころのゆかり

あひ 何事ともいふも世にたかひ

之作

あひ ちかひの玉の枝のあつた

あひ ほかむらむよ葉まきも帰し

之作

あひ ちかひの枝のあつた

あひ ちかひの枝のあつた

之作

あひ ちかひの枝のあつた

あひ ちかひの枝のあつた

之作

あひ ちかひの枝のあつた

あひ ちかひの枝のあつた

之作

あひ ちかひの枝のあつた

あひ ちかひの枝のあつた

之作

あひ ちかひの枝のあつた

あひ ちかひの枝のあつた

之作

あひ ちかひの枝のあつた

あひ ちかひの枝のあつた

古乃内よい通れ大秘事一と名白事とていふことありく
くわぬよ心と分りしんぬよ一とていふこと

⑨六義我之事

風賦以興雅頌カガヤクハ奇乃六根ともいふ今集と六義の事
其興之六首と引て書りう然もこころ遠ひけりよる
也や公に卿風メタの而少セ是非の相とてとくひとて其外
賦カガヤクととくめとて以オスス興メタ雅カガヤク頌イハヒカガヤクまがし皆いよ
おもひよるも其の奇とてとくひとてとくひとてとくひとて

よ六凡六義乃根がハ毛詩なりとてかたわりのうらとて
披身してとらたるととくひとてとくひとてとくひとて
大凡じてとて六種之六義之毛詩よ風雅頌の六義賦
以興の六種と知るよ和奇とて交相を云雅と篇
よ一六義皆和とておもひ興之六義の名同とて
あてきとてとて毛詩乃とてとてとてとてとて
何や公に卿又とて少ひ相とて遠ひりや和事皆
あてきとてとてとてとてとてとてとてとてとて
公の毎とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

見ちのむと何のむと云ふも

賊

「此は待たず賊の輩に
陳其車ツハハリんと備よるも
云の女は著ク歌れんとはら
いりといひりくはめり
あきれたる定家つ流し
よとくあひかたるる」
賊の輩は待たず賊の輩に陳其車ツハハリんと備よるも云の女は著ク歌れんとはらいりといひりくはめりあきれたる定家つ流しよとくあひかたるる

出る目には方なりと云ふも

見ちのむと何のむと云ふも
と云ふも何のむと云ふも

花よりそぶ花さくらしひと

見ちのむと何のむと云ふも

同くさして抱ぞ入て居る大花目

見ちのむと何のむと云ふも

作乃者や柳と云ふも

見ちのむと何のむと云ふも

見ちのむと何のむと云ふも

見ちのむと何のむと云ふも

見ちのむと何のむと云ふも

見ちのむと何のむと云ふも

○此
かゝる人等也よきこと類とせしめぬは世の事なりたよ
ゆゑにこれにてらるる事それなりけりけりけりけりけりけりけりけり
かゝる事にてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
世に居るものと世に居るものとあつてあつてあつてあつてあつてあつて
川等とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
多の事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
大中の事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事

下紅糸腰にまがりの宮居小

是を彼起とせよよき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
はよき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事

是則に在りては

と御代り物万代よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
つるあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
彼類とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事

又家神の風は魚のこゝろ也よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事
魚はよき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事よき事

の交りしにナニありまよふにあらむと申すは
又意非のちらふらむ

他ちらふびはとわ真のまじ

の頌 いふに 治室してわらひの御よあつては後とつるとまわ
又頌ハ誦之稱讚し多しといふはけしむ故に頌といふは
宗祇之頌ハ容之誦之容ハ王者の威徳とくさるり出してけしむ之誦
いふは世とがわて非よきことといふ又頌ハ世とがわてけしむは内より
いふは世とがわてけしむは内より
いふは世とがわてけしむは内より
いふは世とがわてけしむは内より

あひつひへ又或は天竺しては陀羅翻して頌と云頌ハ表とらる

む様をけける玉のこぼり水 やせり

けりていひてあつては宗祇のいもあつては非よきまじ

非れも指やけの家様

けりていひてあつては宗祇のいもあつては非よきまじ

非れも指やけの家様

けりていひてあつては宗祇のいもあつては非よきまじ

○篇序題曲流と云事ノ五ツの言系ノ五神ノ六義ノ和奇

の六根ノ人ノ此ニツとたどり明りゆるべ万れ道の序破ハツキウ

諸ホウ指ロシ篇序シヨ正流通シヤウ固縁コエン辟ハク吟インの亦ナラ又マタ後ノチと云事

○篇ハ 五文字イハレと云事ト云事と云事ト云事。序ハ 第二ニ白ハク次ジと云事ト云事

○題ハ 第三サン白ハクと云事ト云事と云事ト云事。曲ハ 第四シ白ハクと云事ト云事

○流ハ 第五ゴ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

右ミダと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○篇ハ 第六ロク白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流ハ 第七シチ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○題ハ 第八ハチ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○序ハ 第九ク白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○曲ハ 第十ジュウ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流ハ 第十一ジュウイチ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○題ハ 第十二ジュウニ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○序ハ 第十三ジュウサン白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○曲ハ 第十四ジュウシ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流ハ 第十五ジュウゴ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○題ハ 第十六ジュウロク白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○序ハ 第十七ジュウシチ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○曲ハ 第十八ジュウハチ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流ハ 第十九ジュウキュウ白ハクと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○序

○曲

○流

○題

○篇

○類 抄本セウホンと云事ト云事と云事ト云事

○流 成乾セイケンと云事ト云事と云事ト云事

○類 抄本セウホンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流 成乾セイケンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○類 抄本セウホンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流 成乾セイケンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○類 抄本セウホンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流 成乾セイケンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○類 抄本セウホンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○流 成乾セイケンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

○類 抄本セウホンと云事ト云事と云事ト云事と云事ト云事

色歌引の羅のじらひらとろくであれ

○月跡の持場代書の朝がす 教所

くへへる回と又くともあり

○うらびおれじよ依枝の夜もまて 若山

氷とけても雪はよより

○らりかゝる野火の死つ下 藤 順光

此の白の若をれ下の白の曲のふらりてまらんとどきこり

なとまよらんとくは白と篇序類どろりとして若白

しつりとしんををすらてまのこし

風がづつきへあつははれ

○花よりおれ夕られまらて 彦乃

おはるの二つはまはいかり

○おてみまげ月とことまれ 依坂

此の白の若れとろくは曲のむらりてまらりつれぬをよ下の

白めて篇序類のふめておあまけまびし

○おあまびしとく奇よふけ五つは身すらとろくは又とろくは

流る下よ篇序類とろくは曲流して一白よ篇序

題もろくは曲して四白よ篇序類とろくは一序奇

きくくあはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

糸のおがきよひくしあまのり

おそぎやうしあまのり 信照

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし 因乃

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし ゆゑ

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし 新

あはよし曲ふともせし

あはよし曲ふともせし

非情を親白判懐の作ハ不堪キ者ノ妙カと耳ノ又モ
 一疎白ハけレいハもハ遠カをレとレりハそハいハいハりハ
 事ハ一ハとレそハ定カるハ平ノのレとレいハいハちハらハりハ日ハ也ハ
 女ノのレとレいハいハりハにハいハりハれハまハえハいハいハちハらハりハ
 みどハらハりハ又モ秋ハ能ハ階ハをレとレハハ氷ハ精ハハハ黒ハ物ハハハ後ハ階ハ
 とレりハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ
 れハらハりハ音ハ通ハ電ハとレいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ
 純ハとハちハとハ人ハとハ耳ハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ
 ちハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

親白ハ体ハよハあハいハぬハよハとレいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

〇親白

〇疎白

ちハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ
 一ハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

いハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

いハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

かハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

ちハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

いハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

あハとハいハいハちハらハりハとレいハいハちハらハりハ

乃やまらむとけりるもつと又辨てくるもあつた
但く高の神心中のそよびのそよく堪然の作者よとお
ては親白翁といふのは甚深妙の事と傳ふ
ゆるんとも知しは疎白の翁と傳ふとていづとて
人志とあはれむとありあつたといふとて傳ふ
世とて人あつたといふは神をの老とて傳ふ
くもいふは但親白疎白くも付んつとていづとて
必しと付合はれはあつたといふはあつたといふは
發白とていふは二神を連袂に傳ふとていふ

親白 づげの翁水は繪とて紙を川

疎白 屯まづは書は流の綿糸

あつたといふは神を連袂に傳ふとていふはあつたといふは
あつたといふは神を連袂に傳ふとていふはあつたといふは

親白 親白△唐海の香はむちあつた

疎白△あつたといふは書は流の綿糸

季吟云親白の香は耳らつたといふはあつたといふは
白は神の目録の香はむちあつたといふはあつたといふは
白疎白は流の香はむちあつたといふはあつたといふは

是と程の如く也て離落と連袂と一放あつた姿とい
 ろくよあつた人といひ但言の意の使人の情と吐物
 されば此れはさむのさひよりとつらのもうよらんさ
 めひもあつたといふことすもあつたといふことすも
 とすもいふことすもあつたといふことすもあつた
 愁と落しはあつたといふことすもあつたといふこと
 とすもあつたといふことすもあつたといふことすも
 此後とあつたといふことすもあつたといふことすも
 相とあつたといふことすもあつたといふことすも

こゝろとあつたといふことすもあつたといふことすも
 く眠りあつたといふことすもあつたといふことすも
 とすもあつたといふことすもあつたといふことすも
 此れはさむのさひよりとつらのもうよらんさ
 めひもあつたといふことすもあつたといふことすも
 とすもあつたといふことすもあつたといふことすも

③有文とあつた

是がよとあつたといふことすもあつたといふことすも
 よあつたといふことすもあつたといふことすも

とくしき常の束帯ツツタイの姿とくしきとくしき付合ありあ
白の縹シロのき續ツギけつるもあつとらあるべし

色袂 ○梅は月ツキのあはれをさむひらけ 襦 襦き

船借 △序シて先きの細く扇外 扇 扇外

お社ヤやまのつとくをさむあ

〇初ハツのつとくをさむとくをさむとくをさむとくをさむ

〇注ツすくしよらるべし常の若き公卿のあつとくしき

とみさぐとくしき付合とあむとくしきツキはあつとくしき

色袂 〇梅ツキきての初日と曲れ光外 宗紙

雛落 △心ココロのつとくをさむとくをさむ 扇 扇外

是あやゆれのつとくをさむとくをさむとくをさむとくをさむ

〇古地コヂやとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき

〇草クサのつとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき

とみさぐとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき

とみさぐとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき

とみさぐとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき

とみさぐとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき

色袂 〇梅ツキとくしきとくしきとくしきとくしきとくしき 船外

雑書

△元日の大晦日辰始

書
今笑

こゝろもやうひゆるんまねども右三種とてこころ
 可くしうくの風情とてつるもれど書うつらむと
 まつたは元はまの事とてつるまゝとまゝとて
 が海一まゝよふとれどもやうくもまゝとて
 よくまゝとてありやうくまゝとてまゝとて
 する白飯よはに精れぬとてまゝとてまゝとて
 寝る海やうまからゆるがぬの事とてまゝとて
 八十一の事とてまからゆるとてまゝとて

